廬舎那仏座像

8世紀に造られた唐招提寺の本尊・廬遮那仏の坐像は、当時の中国・唐王朝の真髓を今日に伝えるものと考えられています。高さは3メートルを越え、奈良時代に盛んに用いられた「脱活乾漆造」と呼ばれる技法によって造形されています。

脱活乾漆造は非常に骨の折れる工程で、粘土の基部に麻の布を一枚一枚貼り付けるところから始まります。乾燥させた塑像の内側を掻き出して空洞にした後、漆に小麦粉などを混ぜて作った特殊なパテで仕上げを施します。廬舎那仏坐像の場合、台座となる蓮の花と光背には金箔が使用されました。5メートルの高さがある光背には、蓮の花弁と864もの数の仏像が刻まれています。

4世紀に鳩摩羅什という僧侶による経典には、上記の表象が生まれた理由に次のような説明を与えています。「われ今廬遮那、方に蓮華台に坐し、周匝せる千華の上にまた千の釈迦を現ず。一華に百億の國あり、一國に一釈迦在り、各菩提樹に坐し、一時に仏道を成じたまふ。」